

鮮やかな切り口

樋口宗司

そこから透き通った樹液が
みるみるあふれ球に膨らんでゆく
吹く涼風に水玉がゆらゆら揺れる

水玉は膨れ砕けまた膨らみ
周囲の茎達がそうするように

頸の上に樹液を送る

気儘だった花は今はなく

ただ生暖かいぬめりが

己自身に空しくへばりつく

剣に似た葉にとり囲まれて
青紫色の小さな花
移り気でおシャレな
その花達の下に長く伸び

透き通った青い茎

葉先に結ばれた朝露が

花達の喝采を浴びながら

ココロと葉の渓谷を駆け落ち

葉と茎の境目で一休み

幾つもの水玉は一つになって

また茎を伝わり落ちる

その茎を誰かが切った

カミソリのように鋭い何かで

円い切り口に葉脈が点々と浮き

豆電球の仄かな明かり

ただ一人の広い部屋

目の中は天井の黒いしみ

乾いた胸に触れる己の手の冷たさ

群像の中で気付かず

愉快に過ごしてきた昨日までの日々

小柄で すこし勝気な

かの花のように艶やかに

何時も輝いていた君

遠く引き裂かれ

初めて知る

私の内の鮮やかな切り口